

吃音のある子どもたちのセルフヘルプ・グループ活動の展開（Ⅰ）

～吃音親子サマーキャンプの実践から～※

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

1、はじめに

吃音は人類とともにある現象である。日本における吃音臨床は1903年の伊沢修二による「楽石社」の創立が始まりである。以来一世紀になるが吃音の原因はいまだにわからず、治療法は確立されていないのが現状である。それは、どもる人にとってこれから自分はどうなるのかという「生きられた問いに手早く答えられるような大きな物語が、専門家の側からは提供されないという事態」（伊藤智、2005）であることを意味している。

1966年にはおそらく世界で最も早い段階で誕生した、どもる人たちのセルフヘルプ・グループ「言友会」が創立されている。同年、その大阪支部が生まれ、現在は「NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト」という名称で独自に歩んでいる。このグループがことばの教室の教員や吃音の研究者、臨床家たちのネットワークである「日本吃音臨床研究会」に協力する形で開催されている、「吃音親子サマーキャンプ」という二泊三日のキャンプが今年で29回目を迎える。

自身の吃音と向き合うキャンプという場において、子どもたちが受け取るものは何なのか。キャンプという子どもによるセルフヘルプ・グループ活動を通して、子どもがどう自己変容していくのかを明らかにしていきたい。

2、吃音の課題について

考察に入る前に吃音という現象とその課題について整理したい。地域、民族を問わず人口のおよそ1%の人がどもると言われている。一般には音の連続や引き延ばしが吃音であると理解されているが、年齢が上がるに従い音の出ないブロックを示すのが主流である。つまり、無口を装えば他者からはそうとはわからないのが吃音である。幼児期からどもりだす人が多いが、思春期、青年期からという人もいる。最大の特徴は波があること、数日、数ヶ月、数年、そして一日の中でもよくどもったり、どもらなかつたりという変化がある。何らかの言語訓練的な試みと関係なく、波がある。

この捉えがたい吃音をどう理解すればいいのか。アメリカ言語病理学のジョセフ・G・シーアンは吃音を海面に浮かぶ氷山に喩える。海面上に浮かんでいるのがどもる様子と考え、氷山の大部分を占める海面下の部分である、どもることに対する「何か悪いことをしたような気持ち」（Speech Foundation of America、1975）などがどもりの課題であると指摘する。つまり、外から見ることでできるどもる状態、どもること自体に問題があるのではなく、そこから受けるさまざまな影響が問題となる。これが吃音の課題である。

日本吃音臨床研究会の伊藤伸二はこの吃音の課題を「話すことから逃げ、どもりを隠そう」とする行動、「どもりは劣ったもの、恥ずかしいものだ」という思考、「どもるのは情けない、みっともない」という感情、そして「話すとき緊張のあまり、硬直して人とふれあうのを拒む」身体の4側面が本人の生き方に与える影響があると整理している（伊藤伸、2013）。セルフヘルプ・グループで取り組むことが示唆されている。

3、フィールドについて

キャンプの参加資格は高校生までのどもる子どもでもある。ただし、親子での参加が原則である。2017年度を例にとると、どもる子どもは小学生 14 名、中学生 7 名、高校生 11 名の計 32 名、その兄弟姉妹 10 名、父親 7 名、母親 27 名、スタッフは 48 名の総勢 124 名、場所は彦根市立荒神山自然の家である。

スタッフの三割強は NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトの運営を担う、自身のどもりの課題を整理できている、吃音を個人史の一部として位置づけ、了解しているどもる成人である。その他、ことばの教室の教員や言語聴覚士などから構成されている。近年、このキャンプを卒業した青年がスタッフとして参加することも増えている。私はどもる子どもの親であると同時にスタッフとして 2011 年から参加している。

「話し合い」と「劇の稽古と上演」がキャンプの 2 つの柱であるが、以下の考察は話し合いに焦点化したものである。

4、キャンプにおける「話し合い」の展開

キャンプ初日の 1 時間半と翌朝 1 時間半の作文に続いての 2 時間が話し合いの時間である。小学低・中・高学年と中学生、高校生のグループに分け、それぞれのグループにどもる成人やことばの教室の教員、言語聴覚士も参加する。話し合いを深める役割を担うのである。

どもる子どもはことばの教室に通い、そこでのグループ学習という機会でもなければ、どもる友だちに出会うことはまずないことである。「どもるのは自分だけ」という孤立感を抱えている子どもは多い。キャンプへの参加に乗り気でない子どももいるのは、そういう場で楽しく過ごせるとは想像できないからだ。

キャンプ最初のプログラムは全員参加の「出会いの広場」である。1 時間半、体育館で声を出し、身体を動かしてのアイスブレイクである。子どもはそこに普段見ることのない親の姿といろいろな年齢のどもる子ども、大人を発見する。キャンプという場になじんでいくと同時に、他者への「興味・関心」が自然と引き出されていく。話し合いの底流に流れる感覚である。

自分だけがどもるという孤立感を抱えているということは、どもりに対するさまざまな思い、疑問、言葉が子どもの中でモノログとなっているということである。グループでの話し合いは、この思いを解放し、ダイアログへと導く場である。

キャンプに初参加でどう話しをしていいのかわからない子どもには複数回参加している子どもの語りやどもる成人のストーリーが参考になる。二日目の作文で吃音体験を書いた後は話し合いに身が入る子どもは多い。体験を刻み込むという書く作業を通して、語りが豊かになるのである。

よくどもりながら積極的に話す子ども、傍目からはわからないどもり方だが深く悩んでいる子ども、どもりから受ける影響はさまざま。こうした気づきの中、話し合いでは共通の体験や気持ちだけでなく、吃音の基本知識や困りごとへの対処法なども分かち合われる。

友だちのからかいにどう対応すればいいのか。何もできないという子どもに、他のメンバーが次々と自身の体験を語る。無視するというものから、ことばの教室の先生と考えて、作文を書く。それをみんなの前で読むという意見や自分では読みたくないのお母さんや担任に読んでもらうという考え。どもり方だけでなく対処法、選択肢もさまざまであることを知る。それを交換し合える大切な仲間であるという意識が生まれる。

健康観察に関するエピソードがある。ある子どもの「カタヤマという苗字のカの音が出ない時はカを飛ばして、タヤマと答える」という技の披露には一同のけぞった。笑いもありえないという声がかたまる。でも、カタヤマと聞えるという意外な発見。いまでも語り継がれている話である。

友だち関係を巡る困りごとへの応答だけでなく、どもりながら課題をこなした、やりとげたというユニークな結果やユーモアのあるまだ語られていなかったストーリーが見出される。よき聴衆のいる

話し合いはナラティブ・アプローチの場になる。こうした視点を持って学校生活を送ることは自身の可能性を引き出すことになるだろう。

話し合いでそれなりに苦労のある日常をサバイバルしている自分を仲間とともに確認するということは、どこか誇らしいことでもある。「どもっても大丈夫!」、「どもってできないことは何もない」という吃音肯定、どもる自分を肯定する価値観、態度を子どもたちは発見し、学んでいく。

5、まとめ

キャンプの参加者は宮城から沖縄まで、子どもたちにとっては大切な仲間であるが、日常生活で出会うことのない人たちである。自分を開放しても安心、安全が保障される場で子どもによるセルフヘルプ・グループ活動が展開されている。

構造化された二泊三日の中で、子どもたちは「孤立感からの解放」と「仲間意識の形成」を経験している。その上で、どもる自分を認める「自己肯定」という吃音という一生付き合う、人生に織り込んでいくものとの向き合い方、その価値観を学び、それを子ども同士で確認、承認し合っている。このグループの主張する「吃音とともに豊かに生きる」という価値、文化がキャンプという場で実践されている。

引用・参考文献

伊藤伸二、2013、「吃音とともに豊かに生きる」、NPO 法人・全国ことばを育む会

伊藤伸二、2016、「吃音親子サマーキャンプの場の力」01～04、

『児童心理』2016年6月号～9月号、金子書房

伊藤智樹、2005、「ためらいの声」、『ソシオロジ』154号、Vol150、社会学研究会

Speech Foundation of America、To The STUTTERER

(=1975、内須川洸・大橋佳子・伊藤伸二訳・編、「人間とコミュニケーション」、日本放送出版協会)

※ この文章は西日本を襲った記録的な大雨の影響で中止になった、「日本子ども社会学会第25回大会」(2018年7月7日・8日 於 武庫川女子大学)の発表要旨集録用にしたものである。

吃音親子サマーキャンプで生起していることを記すにはあまりにも少ない分量ではあるが、子どもたちの多くがサマキャンで一番楽しかったと感想を述べる「話し合い」の概要は伝わるのではないかと思う。